

SEND の文化活動を通したイメージの変化

—ステレオタイプを緩和する可能性—

夏 蕊

要 旨

筆者は 2016 年の春学期に SEND (Student Exchange Nippon Discovery) プログラム¹によってタイのナレースワン大学に派遣され、同大学の人文社会学部で 15 日間の日本語教育実践を行った。本稿は、ナレースワン大学で筆者を含む派遣チームが主体的に企画した「イメージ！チェンジ」と題する文化活動の実践について報告するものである。活動の結果から、文化活動を通してステレオタイプを緩和する可能性と、協働的な文化交流の意義が示唆された。

キーワード

SEND プログラム 文化活動 協働 ステレオタイプ 異文化理解

1. はじめに

筆者は、SEND プログラム（以下「SEND」）において、2016 年の夏にタイのナレースワン大学（以下 NU）に派遣され、同大学人文社会学部で 15 日間の日本語教育実践を行った。派遣されたのは、筆者に早稲田大学の学部生 3 名を加えた計 4 名である。実践内容は、文化活動、授業見学、日本語学習サポートなど多様であった。

本稿は多様な実践内容のうち、筆者を含む派遣チームが主体的に企画し、タイの学習者と協働で行った「イメージ！チェンジ」と題する文化活動について報告するものである。なお本稿では、「イメージ」とは、相手の見た目や性格などから抱く印象のことを指す。「イメージ！チェンジ」の概要、準備、実施、結果及び意義について述べた上で、協働的な文化交流を通したステレオタイプ緩和の可能性について考察する。

2. 文化活動の概要

「イメージ・チェンジ」とは、筆者を含む派遣チームが NU で行った文化活動の総称のことである。本節は派遣メンバー、「イメージ・チェンジ」の企画案の背景、目的と準備について述べる。

2.1 派遣メンバーと企画の背景

NU 派遣チームのメンバーは、中国人大学院生の筆者と、専門も学年も異なる日本人学部生3名の計4名であった。所属や学年を超え、学部生と院生による混合チームで研修を行い、具体的な活動の内容については、この派遣メンバーが主体的に企画・運営する点が SEND 派遣の特徴である（鈴木 2015）。

国籍も専門も年齢も異なる派遣メンバーが、企画から実施までを主体的に実現するためには、チームとして一丸となることが不可欠であると考え、筆者らは常に協働的な活動を意識した。実際の活動の過程では、他のメンバーに対する認識が深まるとともに、互いの印象が徐々に変化していくことを感じた。さらには「日本人大学生」や、「中国人留学生」、「大学院生」、「学部生」といったカテゴリーの束縛が消え、カテゴリーによるステレオタイプなイメージが緩和した。協働的な活動を通じたこのような変化こそが、チームワークの構築において重要であった。

このような協働作業によって、お互いのイメージ変化の重要性に気が付いたメンバーは、このプロセスが派遣先での実践にも応用可能ではないかという発想に至り、「イメージ！チェンジ」という活動を企画した。

2.2 「イメージ！チェンジ」の目的と準備

「イメージ！チェンジ」は、お互いの文化を体験し、お互いのイメージが変化することによって、ステレオタイプを緩和することを目的とした。この目的を達成するために、派遣メンバーのみならず、タイの学習者とも協働的な活動を行うことが必要となる。

そのため、日本人による日本の文化紹介だけではなく、タイの学習者にもタイの文化を紹介してもらう活動も企画案に入れた。これによって、一方向的な文化のやり取りになることを避けたのである。また、タイの学習者と企画案を共有し、派遣される前から SNS を利用して NU のパディと連絡を取り合い、現地に入ってから、企画案の修正から活動の準備、実施までをタイの学習者と常に協力して行った。

3. 文化活動の実施

2016 年 8 月 29 日から 2016 年 9 月 9 日の 13 日間にわたり、筆者らはタイの学習者と協働で 7 回の文化活動を行った。本章では、文化活動の構成を紹介し、その中からイメージの変化と直接関係しているマインドツリー²活動に絞って紹介する。

3.1 文化活動の構成

「イメージ・チェンジ」は下記 7 回の文化活動からなる。第 1 回と第 7 回は活動の導入と振り返りと位置付け、ステレオタイプの緩和を可視化するために、マインドツリーを導入した。第 2 回～第 6 回は、多様な日本文化や、日本語の言葉の豊富さ、語感及びニュアンスを感じてもらうために歌作りと曲作りの活動を行った。

表 1 文化活動の構成

日付	テーマ	活動内容
1 回目	マインドツリー①	日本人とタイ人の相互のイメージを確認する
2 回目	物作り	日本のタイの民芸品を作る
3 回目	歌詞作り	みんなで歌の歌詞を作る
4 回目	踊り	日本の盆踊りとタイのタイダンスを踊る
5 回目	曲作り	みんなで作った歌を練習する
6 回目	私たちの夏祭り	第 2 回から第 5 回の活動の発表会
7 回目	マインドツリー②	日本人とタイ人の相互のイメージを再確認する

3.2 マインドツリー活動

文化活動において、ステレオタイプの緩和を可視化するため、最初の第 1 回と最後の第 7 回にマインドツリー（図 1）を導入することにした。

このマインドツリー活動は、全 6 回の授業を通して、日本人とタイ人の相互のイメージの変化を可視化するためのものである。具体的には、付箋に日本人のイメージを書いてもらい、事前に教室の後ろに用意した 2 つのマインドツリーに貼ってもらう。同時に筆者のチームもタイ人のイメージを書き、マインドツリーに貼る。このような作業は第 1 回の導入セッションと第 7 回の振り返りの授業で計 2 回行った。第 1 回と第 7 回で付箋の色を変えてもらい、授業を通じて、イメージがすっかり変化した場合、第 1 回の授業で貼り付けた付箋を剥がしてもらうことにした。

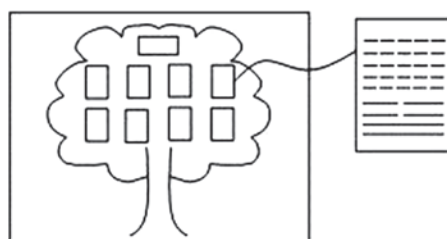


図 1 マインドツリー

3.3 導入（マインドツリー①）

導入セッションで、全体の流れを学習者と共有後、1 回目のマインドツリー活動を実施した。その結果、日本人に対するイメージに関しては、筆者らの予想通り、「真面目」「忙しい」「時間に正しい」など日本人に対する典型的な認識が見られた。また、「アニメ」「かわいい」など文化的な側面からのコメントや、「厳しい」、「むくち」³、「分かりにくい」など、こちらが想定していなかった意見も見ることができた。タイ人に対するイメージに関しては「微笑みの国」から連想される「笑顔」というコメントが多く、「シャイ」や「親切」、「大人しい」などの性格に関するコメントもあった。

3.4 振り返り（マインドツリー②）

最後の振り返りセッションで、2 回目のマインドツリー活動を実施した。1 回目の活動の時に書いてくれたイメージと比べ、日本人に対するイメージには以下の変化が見られた。

表2 イメージの変化（抜粋）

	マインドツリー①	マインドツリー②
日本人に対するイメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・やさしい、可愛い ・無口、厳しい、冷たい ・分かりにくい 	<ul style="list-style-type: none"> ・やさしい、可愛い、お酒が好き ・タイ人にやさしい、タイ語が面白い ・分かりにくい
タイ人に対するイメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔、親切 ・暑さに強い ・シャイ 	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔、親切、やさしい ・バイクが得意、歌が上手、行動力がいい ・シャイ、明るい

4. 考察

4.1 イメージの変化

7 回の活動を通して日本人とタイ人の相互のイメージが変化したことが明らかになった。マインドツリーを通して変化した相互のイメージには以下の特徴が見られる。

まず、文化活動実施前には、ステレオタイプ化されたコメントが多かった。最初の導入セッション時の日本人に対するイメージは、「真面目」、「冷たい」、「仕事が好き」などであり、タイ人に対しては、「微笑みの国」というキーワードから連想される、「笑顔」というコメントが見られた。こうした認識は社会一般でステレオタイプ化されたものである。

一方で、文化活動実施後では、お互いのイメージに対して出てきたコメントは、実際に交流し、活動することで得られた認識が多かった。最後の振り返りセッション時の日本人に対するイメージは、「タイ人にやさしい」、「お酒が好き」、「愛想な人」などであり、タイ人に対するイメージは、「歌が上手」、「明るい」などであった。これらは一般化されるものではなく、交流した相手の特徴を書いたものである。

また、導入セッション時の付箋が剥がされた例もあった。例えば、2 回目のマインドツリーでは、「分かりにくい」という日本人のイメージが書かれた付箋が剥がされた。さらに、最終セッション後、学習者から「前に日本人のイメージは分かりにくい人と思った今あいそ人と思う」などのメッセージをもらった。

以上のことから、7 回の活動を通してお互いのイメージが変化し、ステレオタイプの緩和が見られた。

4.2 協働的な文化活動とステレオタイプの緩和との関係

ステレオタイプを緩和できたのは、2.2 で述べたように、筆者のチームが協働的な活動を常に意識し、タイの学習者と企画、実現のプロセスを共有したためだと考えられる。

活動を通して、タイの学習者は実際に日本語を使って筆者を含む派遣メンバーと交流し、日本や日本人について深く理解することができた。同様に、筆者らの派遣メンバーもタイやタイ人について深く理解することができた。この過程でお互いの信頼関係が構築され、

一方的な文化紹介ではなく、協働的な文化活動が実現した。このように、協働的な文化活動こそがお互いの理解を深め、ステレオタイプの緩和に繋がったのだと考えられる。

4.3 ステレオタイプを緩和する意義

以上のように、筆者を含む派遣メンバーは、協働的な文化活動によってステレオタイプを緩和することができた。ステレオタイプを緩和することには以下のような意義が考えられる。

相手に対して一度ステレオタイプが形成されると、「そのカテゴリーに含まれる人に出会うと、ステレオタイプを自動的に活性化させてしまいがち」（上瀬 2002:13）で、相手の「個性を無視して人を判断してしまいやすい」（上瀬 2002:13）との指摘がある。

将来国際交流の場で活躍するうえで、目の前の相手を意識したコミュニケーションは重要であり、ステレオタイプを回避すること、またこれを緩和することには意義があるといえる。筆者らがタイの学習者と共に実現した協働的な活動は、実際にステレオタイプを緩和する経験となり、学習者にとって今後貴重なものとなるだろう。

また、ステレオタイプを緩和することは、学習者の今後の日本語学習にも繋がると考えられる。実際に、ステレオタイプとしての日本人像を払拭することにより、日本や日本人に対する関心が増し、学習モチベーションが向上したという学習者がいたためである。

5. まとめと今後の課題

本稿では、SEND 派遣において行った「イメージ！チェンジ」と題した文化活動の概要、準備、実施、結果及び意義について述べた。2 回のマインドツリー活動によって、日本人、タイ人相互のイメージが変化した。そこで、協働的な文化交流によって、ステレオタイプを緩和する可能性が示唆された。今後、筆者ら派遣メンバーと現地の学習者が、SEND の経験をどのように生かしていくのかについて考えていきたい。

注

- 1 SEND プログラムについては、鈴木（2015）を参照されたい。
- 2 マインドツリー：マインドマップを作る方法を参考にして、話題を聞く際に頭の中で浮かべるイメージが目に見えるように、キーワードを記録する媒体のことである。今回の媒体はツリーの絵を使って呈示するので、「マインドツリー」と呼ぶことにした。
- 3 本稿のコメントはすべて原文ママである。

参考文献

- 上瀬由美子（2002）『ステレオタイプの社会心理学』サイエンス社
 鈴木伸子（2015）「SEND 海外派遣における日本語教育実習」『早稲田日本語教育学』19、pp. 127-131

（なつ ずい 早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程）